

パブリックスピーキングとしてのアカデミックプレゼンテーションにおける聴衆重視の仕組み:
式辞スピーチとの比較から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 深澤, のぞみ, ヒルマン小林, 恭子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/39714

パブリックスピーキングとしての アカデミックプレゼンテーションにおける聴衆重視の仕組み — 式辞スピーチとの比較から —

深澤のぞみ (金沢大学国際学類) nozomif@staff.kanazawa-u.ac.jp

ヒルマン小林恭子 (元金沢大学留学生センター) kyokoh@gmail.com

【要旨】

公的な性質を持つ日本語の口頭コミュニケーションを、「日本語パブリックスピーキング」と呼び、その代表的なジャンルであるアカデミックプレゼンテーションと式辞スピーチを、聴衆重視の仕組みに焦点を当て分析した。その結果、アカデミックプレゼンテーションでは、学術的な内容を客観的に伝えることが重視されているが、その場の聴衆を意識した表現も、最小限ではあるが用いられていることが明らかになった。本稿で比較して検討した式辞スピーチでは、表現の面でも話の内容の面でも、様々な方法を用い、その場の一体感を作り上げることが極めて重視される傾向があり、パブリックスピーキングに含まれるジャンルによって、聴衆重視の程度には違いがあることが示唆された。

【キーワード】

日本語パブリックスピーキング、アカデミックプレゼンテーション、式辞スピーチ、聴衆重視

1. はじめに

グローバリゼーションが進む昨今、日本国内は多文化共生社会を目指し、多様な外国人の受け入れが進んでいる。中でも、高い専門能力を持つ「高度人材」としての外国人については、日本の経済成長や国際競争力を高めるために受け入れがますます重視され、2012年からはポイント

制が導入され、出入国管理に関して優遇措置が受けられるようになってくる¹⁾。

このような高度人材としての外国人には、日本企業における国際戦略関連の業務や、日本と海外拠点との様々な調整を行うブリッジ的な業務や機関トップの通訳など、高い日本語力と社会性や専門性を持っていることが期待される。外国人に対する日本語教育でも、今後は、高度人材外国人養成を目指した高い専門性を持った教育が求められることが増えるだろうと予想される。

口頭でのコミュニケーションは日本語力の中でも最も基本的なものであるが、筆者らはこの中でも、外国人が日本語で社会性および専門性の高い活動を行うのに必要な能力を「日本語パブリックスピーキング」と位置づけ、その特徴を明らかにした上で、高度人材外国人に対する日本語教育への適用を検討する必要があると考える。

パブリックスピーキングとは、ヒルマン小林・深澤 (2009) で「ある程度改まった場所で、一人の話し手が対象となる複数の聴衆に、自分の責任において自分の考えを論理的にまとめて伝えようとする」と定義しているが、単に自分の考えを述べるだけではなく、聴衆に伝えることが重要であり、聴衆重視の言語活動であると言えることができる。パブリックスピーキングには聴衆重視の仕組みがあり、また、パブリックスピーキングに含まれるジャンル²⁾ ごとに、異なる仕組みを持っている可能性があるため、本稿では、聴衆重視の仕組みという観点から実際のデータをもとに検討する。本稿では、そのための方法として、ジャンル分析の手法 (Swales1990) を用いることにする。

2. 先行研究

2.1 日本語教育と日本語パブリックスピーキング

これまで外国人に対する日本語教育において、口頭コミュニケーションの教育は重視されてきており、様々な実践が行われてきている。しかし、平田 (2010) が指摘するように、話し言葉の教育において話し言葉自体をカテゴリーに分類することの必要性があるにもかかわらず、こ

れまであまりなされてこなかったという現実があり、また日本語教育の口頭コミュニケーション教育をパブリックスピーキングという観点から検討した研究もほとんどなかった。そこで筆者らは、日本語教育で従来盛んに行われてきた口頭コミュニケーション教育のうち、アカデミックプレゼンテーション（以下、アカデミックプレゼンと略）や式辞スピーチ、競技スピーチなどを「日本語パブリックスピーキング」に含まれるジャンルとして取り上げ、その特徴の調査分析を行ってきた（ヒルマン・深澤2009、深澤・ヒルマン・小林2012、深澤・陳・張2011など）。

2.2 日本語パブリックスピーキングのジャンルとしての式辞スピーチ

前述の先行研究のうち、深澤・ヒルマン・小林（2012）では、日本語式辞スピーチについて、実際の国際交流イベントなどで行われた式辞スピーチ 20 本を資料として、ジャンル分析の手法で分析を行った結果、典型的な構成要素としてのムーヴとステップ（話し手の表現意図とその下位分類）とスピーチの展開パターンが明らかになった。

まず、式辞スピーチに現れるムーヴには、[開始挨拶] [自己紹介] [対人配慮] [言及] [進行] [表明] [事実提示] [持論提示] [報告] [働きかけ] [乾杯] [終了宣言] の 12 種類が観察され、その下位分類としてのステップが 29 種類認められた。

次に、式辞スピーチをその内容から「導入部」と「主題部」、「結び部」に分けた上で、現れるムーヴとステップの種類分布を見たところ、以下の 3 点が明らかになった。

- 1) 導入部と結び部では、[開始挨拶] や [自己紹介]、[乾杯] や [終了宣言] などが類似のパターンで展開される傾向がある。
- 2) 主題部では、[事実提示] [報告] [持論提示] の要素の後、[希望] [期待] [抱負] のような要素が現れ、結び部へ移行するパターンが頻出する。
- 3) [対人配慮] と [言及] のムーヴとステップがスピーチ全体に観察される。

そして、主題部での[事実提示]では、聴衆と関係の深い内容が取り上げられたり、[対人配慮]のムーヴでは、謝辞や謙遜などのような内容が、

敬語表現を含む定型表現としてスピーチの随所に頻出したりすることが認められ、聴衆重視の仕組みとして働いている可能性が明らかにされている。さらに、スピーチを聴いている聴衆や自分の前に話した話し手に言及したり話の内容を引用したりする〔言及〕のムーヴもよく出現している。これらは、式辞スピーチをする話し手が、聴衆に配慮を示したり、聴衆との一体感を作り出そうとしていることの現れであることがうかがえる。

2.3 式辞スピーチと聴衆重視の仕組み

上述のように、日本語の式辞スピーチの大きい特徴の1つは、聴衆重視の仕組みを持った言語活動であることである。そして、さらには、パブリックスピーキング自体が、聴衆を相手に伝えていく活動であるため、聴衆重視の仕組みを持つことが大きい特徴である可能性がある。しかし一方で、パブリックスピーキングに含まれる様々なジャンルによって、聴衆重視の仕組みが異なることも考えられる。

そこで、本稿では、日本語教育の中でも指導されることが多いアカデミックプレゼンを例に³⁾、どのように聴衆が意識されているのかについて、式辞スピーチと同様のジャンル分析の手法を用いて分析を行い、式辞スピーチと同様の仕組みを持つのか、それとも違うのかなどを検証していくことにする。

3. アカデミックプレゼンテーションにおける聴衆重視の仕組みに関する調査

3.1 調査データ

実際に行われたアカデミックプレゼンテーションを資料とするために、『日本語し言葉コーパス』（国立国語研究所他 2004）から、8タイトルの発表を選び分析することにした。『日本語し言葉コーパス』には、数多くの学会発表データが格納されているが、本研究では、「コア」⁴⁾のデータから、以下のように、8ジャンルからそれぞれ2データないし1データ（男性・女性）⁵⁾を無作為に選んで分析した。なお、「コア」

に該当のジャンルのデータがない場合のみ、「非コア」からも選んだ(表1)。

表1 アカデミックプレゼンのデータ概要

No.	分野	長さ	コーパスでのNo.
01	工学系 (音声関係)	13分16秒	A01F0055 (女性)
02	工学系 (音声関係)	11分56秒	A01M0015 (男性)
03	人文系 (日本語関係)	24分34秒	A02M0076 (男性)
04	工学系 (自然言語処理関係)	14分59秒	A03F0072 (女性)
05	工学系 (人工知能関係)	17分10秒	A04M0047 (男性)
06	人文系 (社会言語学関係)	20分05秒	A06M0092 (男性)
07	社会系 (心理, 統計, 行動科学など)	18分30秒	A07F0844 (女性)
08	社会系 (社会学関係)	16分38秒	A09M0171 (男性)

3.2 分析方法

使用データはコーパスに収録されている際にすでに文字化されているものであるが、これらをさらに「文」を基本単位として記述し、式辞スピーチと同様、内容から「導入部」「主題部」「結び部」の3つに分け、さらに「ムーヴ」(話し手が表現しようとしている意図)と、その下位分類である「ステップ」を特定していった(深澤・ヒルマン小林2012による)。ムーヴの特定後、その下位分類で、話し手の意図が具体的に現れたものであるステップを特定した。特定の際には、話し手の意図と表現形式との双方を判断基準として用いた。

アカデミックプレゼンと式辞スピーチとは目的が違うため異なるムーヴが多く存在する。林他(2009)では、工学系修士論文口頭発表を資料として調査し、ムーヴ解析を行っている。おもに語彙や論理の流れに焦点を当て、学術口頭発表全体の展開を、ムーヴ解析によって明らかにしている。本稿は、今回は学術口頭発表の論理の流れには触れず、式辞スピーチと比較しながら聴衆重視の仕組みについて検討することが目的で

ある。そこで、式辞スピーチに現れた、聴衆を重視するための機能を持つと思われるいくつかのムーヴを中心の視点に据えて分析していくことにした。

具体的には、式辞スピーチの中に現れた聴衆との関係性が重要な要素となるムーヴとして、[開始挨拶][自己紹介][対人配慮][言及][進行][働きかけ][終了宣言]を選び、これらのムーヴがアカデミックプレゼンのデータにはどのように現れるかを観察した。

4. 調査結果

調査結果は、まず、比較的、定型表現が典型的に現れやすいと思われる導入部と結び部から紹介し、次に、主題部について報告していくことにする。

4.1 導入部に現れる構成要素（ムーヴ・ステップ）

アカデミックプレゼンの場合、導入部は短く、すぐに主題部に進む。導入部に現れたムーヴとステップを表2に示す。

導入部には、[開始挨拶][自己紹介][働きかけ]が現れた。ほとんどのデータに[開始挨拶]と[自己紹介]が含まれている。そこにさらに[交誼依頼]が加わっている場合もある。順序は様々である。

表2 アカデミックプレゼンの導入部に現れる構成要素

ムーヴ	ステップ	内容	典型的に現れる定形表現
開始挨拶	発表・報告宣言	発表や報告をする前の宣言	発表を始めさせていただきます
自己紹介	自己紹介	名前や所属の自己紹介	△△の〇〇でございます
働きかけ	交誼依頼	聞き手への交誼の依頼	よろしく願います

以下にそれぞれのムーヴについて、式辞スピーチでの現れ方と比較しながら、詳しく見ていくことにする。

4.1.1 [開始挨拶]

アカデミックプレゼンの[開始挨拶]では、式辞スピーチに出てきたような「こんにちは」などの単純な挨拶は現れなかった。また、式辞スピーチでは、[開始挨拶]に含まれるステップに[挨拶宣言]があったが、アカデミックプレゼンでは、発表や報告の開始を宣言するという内容のステップ[発表・報告宣言]（例1，2，3）を設けることにした。

例1) ～ということで発表します (No.1) ^{6) 7)}

例2) 発表をさせていただきます (No.5) ⁸⁾

例3) 報告いたします (No.4)

例1) では、「発表します」という簡潔な表現であるが、例2) のような「させていただきます」のような表現を使用している例が他にも見受けられた。また、例3) では、「いたします」という表現が用いられている。

4.1.2 [自己紹介]

[自己紹介]は、自分の所属や名前を名乗るムーヴである。学会によっては、発表時間の制約が厳しいため、司会者の紹介があれば、あえて繰り返して名乗らないという場合もあるせいか、[自己紹介]がないデータも見られた。

例4) ○○です (No.8)

例5) △△に所属しております○○と申します (No.6)

例6) ○○でございます (No.7)

簡潔に「～です」という場合もあるが、式辞スピーチと同じように、「～と申します」や「～でございます」の表現が使われている。

4.1.3 [働きかけ]

導入部に現れる[働きかけ]のムーヴは、すべて[交誼依頼]のステップである。具体的には、例7) のようなものである。

例7) よろしくお願いたします (No6)

「よろしくお願いたします」と述べて、主題部に入るという流れが8データ中4例で見られた。一方、式辞スピーチでは、20データ中、導入部で[交誼依頼]が出現した例は3例しかなかった(深澤・ヒルマン小林2012)。アカデミックプレゼンのデータ数が少ないため、単純な比較はできないが、導入部での「よろしくお願いたします」は、アカデミックプレゼンにはよく出現し、式辞スピーチではあまり一般的でない可能性がうかがわれる。

4.2 結び部に現れる構成要素(ムーヴ・ステップ)

アカデミックプレゼンの結び部は短く、主題部でのまとめの後、短い結び部で発表全体が終了することが多い。結び部に現れた要素を表3に示す。

結び部では、[終了宣言][働きかけ][対人配慮]のムーヴが出現する。結び部は短く、たいていは[終了宣言]一つのみというのが結び部の構成要素の特徴であると言える。

表3 アカデミックプレゼンの結び部に現れる構成要素

ムーヴ	ステップ	内容	典型的に現れる定形表現
終了宣言	仕切り	全体のまとめ	以上です
	引き継ぎ	次の話者への引き継ぎ宣言	〇〇へのお話に続けます
対人配慮	謝辞	聞き手への感謝	ありがとうございました
働きかけ	指導依頼	聞き手への指導依頼	ご指導をよろしくお願いたします

4.2.1 [終了宣言]

結び部に現れる[終了宣言]の主な具体例を以下に示す。

例8) 以上です (No1, 5)

例9) 以上で 発表を終わります (No2)

例のように、アカデミックプレゼンに現れる終了宣言は非常に簡潔であることが特徴の一つである。林他(2009)の調査でも、Endingのムーヴが取り上げられ、化学系の修論発表40のうち35の発表が「以上です」で終わっていることが報告されている。このように、アカデミックプレゼンでの終了を宣言する定型表現として、「以上」は典型的なものであることがわかる。

式辞スピーチにおける[終了宣言]では、「～を祈念いたしまして、ご挨拶いたします」のような表現が多く出現し、ジャンルの決め手となる表現の一つであることが明らかになったが(深澤・ヒルマン小林2012)、このアカデミックプレゼンというジャンルでは、ジャンルの決め手となる定型表現の一つとして、この「以上です」挙げられることが考えられる。

4.2.2 [対人配慮]と[働きかけ]

結び部に現れたのは、[対人配慮]ムーヴの[謝辞]のステップと、[働きかけ]の[指導依頼]のステップであった。例に示す。

例10) ご清聴ありがとうございました (No6)

例11) ご指導の方 よろしく願いいたします (No6)

例11) のような指導やコメントを依頼して発表を終えるという形は、今回調査したデータではよく出現するというものではなかったが、学会の専門分野によっては、慣習となっている場合もあるのではないかと思われる。これは、式辞スピーチには出現しないタイプのものであり、アカデミックプレゼンに典型的な表現である可能性がある。

4.3 主題部に現れる構成要素（ムーヴ・ステップ）

アカデミックプレゼンでは、発表の内容そのものを聴衆に伝えることが大きい目的であることは言うまでもなく、特に主題部は、発表の内容が展開される部分である。本稿の目的は、最初にも述べたように、聴衆重視の仕組みについて、式辞スピーチと比較して検討することであるため、式辞スピーチの中に現れた聴衆との関係性が重要な要素となるムーヴと比較した内容を報告する。

アカデミックプレゼンで、主題部に現れた聴衆との関係性のあるムーヴには、[働きかけ][進行][対人配慮]があった。以下には、比較的多く出現した[働きかけ]と[進行]について、例を挙げながら紹介する。

4.3.1 [働きかけ]

主題部に現れる[働きかけ]は、次のようなものであった。

例12) では いつ頃から可能なのでしょうか (No1)

例13) 資料の120ページを ごらんください (No3)

例12) は、[働きかけ]のうち、[問いかけ]のステップである。これは式辞スピーチにも現れており、直接、聴衆に問いかけて、積極的に発表内容に関与を促す機能を持つものである。また、例13) は、聴衆の手元の資料などを見ることを依頼する[参照依頼]のステップである。

両者とも聴衆重視の仕組みの一つとして見なされるものであり、同じ学術的な内容を扱っていても、書かれたものである学術論文には出現しないムーヴであると考えられる。

4.3.2 [進行]

例14) から例16) は、いずれも[進行]のムーヴの例である。

例14) 次に行きます (No3)

例15) 結論に入ります (No8)

例16) 時間もありませんので はしょって紹介します (No8)

[進行]は、式辞スピーチにも現れるが、話の進行を提示する表現であるが、時間の制約が大きいアカデミックプレゼンでは、特に必要なムーヴであり、ジャンルを決定づけるムーヴでもあるかもしれない。林他(2009)では、Outliningの中の「発表行動」に関する表現として扱われている。

5. 聴衆重視の仕組みに関する考察

アカデミックプレゼンは全体的に「です・ます」体が使われており、主題部における学術発表の展開部分についても、一貫して「です・ます」体が用いられている。しかし、式辞スピーチに現れているような敬語や高度に改まった表現はほとんど出現しない。終了部においても、「以上です」(例8)のように、簡潔な表現が好まれている。

ただし、[開始挨拶]においては、例2)の「させていただきます」や、例3)の「いたします」、例6)の「ございます」が出現し、アカデミックプレゼンにおける数少ない敬語使用の例であると言える。また、[働きかけ]の「ごらんください」(例13)、終了部に現れる「ご清聴ありがとうございました」(例10)などもその例である。これらは、客観的に学術的な内容を聴衆に伝えることが最も重視される学術発表ではあるものの、その場にいる聴衆には敬語を用いて、聴衆を重視する姿勢であることを伝える働きがあるものと思われる。

次に、式辞スピーチでは、スピーチ全体の随所に多様な形での[対人配慮]のムーヴが出現していたが(深澤・ヒルマン小林, 2012)アカデミックプレゼンではそのようなことはなく、主に結び部に出現し、聴衆に感謝を表明する形で用いられていた。また、式辞スピーチでは[言及]のムーヴが重要な役割を果たしており、スピーチが行われているイベントへの参加者について言及したり、その発言を引用したりして、場の一体感を高める効果を持っている。しかしアカデミックプレゼンでは、そのような用法は現れなかった。

これらのことから、式辞スピーチでは、その場の一体感を作り上げることが極めて重視される傾向があるが、アカデミックプレゼンでは、基本的には、発表の学術的内容を客観的に伝えることが重視され、しかし、

パブリックスピーキングの特徴として、その場の聴衆を意識した表現が、最小限ではあるが用いられているとすることができる。

6. おわりに

以上、見てきたように、パブリックスピーキングの一つの特徴として、聴衆を重視する仕組みを持つことを挙げることができる。しかし、聴衆をどの程度重視するかの度合いは、パブリックスピーキングに含まれるジャンルによって違いがあることが示唆された。

本稿で分析したアカデミックプレゼンのデータは、数が限られており、専門分野ごとの違いなども詳しく見ることができていないが、今後は、アカデミックプレゼンの専門分野による違いを見ていくとともに、他のジャンルとの比較なども行っていき、パブリックスピーキングにおける聴衆重視の仕組みについて、検証していきたいと考えている。

【付記】

本稿は、北京師範大学で2012年9月23日に開催された「中国北京師範大学-日本金沢大学 日本語教育フォーラム2012」で発表した深澤・ヒルマン「日本語式辞スピーチにおける聞き手重視の仕組み—日本語パブリックスピーキングの特徴として—」に加筆修正したものである。

また、本研究を進めるにあたり、一部に平成22年度科学研究費補助金（基盤研究C）「日本語パブリックスピーキングの教授法確立を目指した総合的研究」（課題番号：22520525 研究代表者：深澤のぞみ，研究分担者：三浦香苗，研究協力者：ヒルマン小林恭子，翟東娜）からの助成を受けている。

【謝辞】

「中国北京師範大学-日本金沢大学 日本語教育フォーラム2012」の当日、貴重なご意見をいただいた北京師範大学の先生方、会場の皆様、そして発表の場を与えてくださった大滝幸子先生に感謝申し上げます。

【注】

- 1) 外国人の日本における活動を、①学術研究活動、②高度専門・技術活動、③経営・管理活動の3種類に分類し、学歴や年収、業績などの項目ごとにポイントを設定して評価を行い、一定以上の合計点に達した外国人を「高度人材外国人」と判定して、出入国管理上の優遇措置を行う制度である。
http://www.immi-moj.go.jp/info/120416_04.html
- 2) ジャンルとは、ここではパブリックスピーキング中で、同質の内容や言語表現上のスタイル、そして同質の全体の構成を持つ談話とみなす。
- 3) 深澤・ヒルマン小林 (2011) によると、現在刊行されている日本語教科書を調査した結果、「スピーチ」や「プレゼンテーション」などの用語が意味の統一がなされずに使用されていること、学術的な内容を持つアカデミックプレゼンテーションを取り上げた内容が多く見られることが明らかになっている。
- 4) 『日本語し言葉コーパス』に収蔵されているデータは、「コア」と「非コア」に分けられている。主な違いは、「コア」は首都圏で出生した話者のデータに限定されていること、そして、付加情報が「非コア」よりも多く付けられていることである。
- 5) 基本的には、男性のデータと女性のデータを各1ずつ選んだが、分野によっては、男性のみのデータしか格納されていない場合があり、その場合には、男性のみのデータを使用した。
- 6) Noは表1のデータ番号を表している。
- 7) 本稿でデータとして用いた『日本語し言葉コーパス』では、もともと個人が特定できる情報については、ノイズ処理がされ、聞こえないようになっている。
- 8) 実際のデータでは、どのデータも「さしていただく」という記述になっている。実際の発音に忠実に書き起こした場合、このような形になるものと思われるが、例としてはわかりにくいため、従来の表現である「させていただく」の記述に修正した。

【参考文献】

- 林洋子・国吉ニルソン・野口ジュディー (2009) 「工学系修士論文口頭発表のムーヴ解析」『工学教育』(J. of JSEE) 57-6, pp. 137-143
- 平田オリザ (2010) 「劇作家として自然な日本語とは何か」『ICJLE2010 日本語教育世界大会予稿集』
- ヒルマン小林恭子・深澤のぞみ (2009) 「日本語のビジネススピーチの特徴と日本語教育への活用の可能性」, 『JSAA-ICJLE2009 日本語教育国際研究大会(オーストラリア ニューサウスウェールズ大学) 予稿集』, p. 123
- 深澤のぞみ・陳会林・張鵬 (2010) 「日本語教育におけるスピーチ指導の可能性—全中国選抜スピーチコンテスト西北ブロック予選の参加校の取り組みを例として—」, 『応用言語学研究論集』(金沢大学人間社会学域) 第5輯, pp. 16-42
- 深澤のぞみ・ヒルマン小林恭子 (2011) 「日本語教科書における口頭発表指導について —日本語パブリックスピーキングの教授法確立を目指した基礎研究—」『金沢大学留学生センター紀要』第14号, pp. 29-42
- 深澤のぞみ・ヒルマン小林恭子 (2012) 「日本語式辞スピーチの構成要素と展開パターン—日本語パブリックスピーキングの—ジャーナルの特徴として—」, 『専門日本語教育研究』第14号, pp. 27-34
- Swales, John M. *Genre Analysis: English in Academic and Research Settings*. Cambridge University Press (1990)